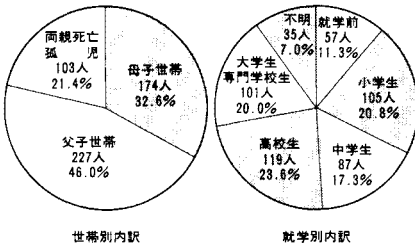


第五章 日々深まる心の傷

——インタビュー調査分析報告

阪神大震災遺児調査結果



震災遺児家庭の実態

筑波大学副学長 副田義也

あしなが育英会は、今年（一九九五年）八月、延べ八百十二人のボランティアを動員して、阪神・淡路大震災による震災遺児家庭二百四ヶースにたいする長時間インタビュー調査をおこなった。同会と各家庭の信頼関係、ボランティアが病氣遺児を主力としており、対象家庭と親を失った心の痛みを共有していることなどにより、各家庭の親子は、震災体験、家族の死、子どもの心の傷、その後の子どもと家族の変化、ボランティア観、行政やマス・コミへの批判などをはじめて率直に語った。インタビューは一時間程度の予定でおこなわれたが、震災遺児家庭の親子の熱心な語りは、しばしば二時間から三時間におよんだ。その談話はテープ・レコーダーによって記録され、のち調査者の手によって起こされ、整理され、最終的には四百字詰原稿用紙十枚から二十枚程度にまとめられて、ケース記録とされた。これは、社会的にみても学術的にみても、きわめて高い価値をもつ資料である。

われわれの研究グループ副田、樽川典子（筑波大学助教授）、加藤朋江（筑波大学大学院）、遠藤恵子（筑波大学大学院）、嶋根久子（文恵看護学院非常勤講師）は、あしなが育英会から依頼されて、この調査を企画・立案し、ボランティアのインタビュ調査を指導し、収集されたケース記録の分析・研究をおこなった。その経過については、必要があるなら、別途に刊行される調査報告書でみてほしい。ここでは、その報告書で得られた二十の主要な発見を、若干のケース記録の部分的引用をまじえながら、述べることにする。

(1) 震災による死は多様である。多いのは崩壊した家屋による圧死だが、それは即死、苦しんだのちの死、救出されたのち治療を受けないでの死、救出されたのち治療を受けられたが効果がなかったうでの死、などに分かれる。そのほか、下敷きになったままでの火事による焼死、震災時の交通事故死、震災後のガス洩れによる中毒死、過労・心労による急死など。

(2) 震災による死は、直前までふつうに生きていた人間を不意に襲う死であり、同じ死の危険に直面している家族のそばで起こる。これらの特性は、その死を間近で目撃、あるいは感得した人の心を深く傷つける。これらの特性は病死や交通事故死の多くにはみられない。病人は病院で治療を受けつつ、次第に衰弱して死んでゆく。交通事故の多くは家族の知らないところ

で起こり、家族は包帯にくるまれた被害者に会う。これらにたいして、震災による死は、残される家族にとつて、いきなり起こる、むき出しに突きつけられる、生々しい死である。

事例 妹（母親）はタンスの、Tちゃんは学習机の横に寝てたそうです。天井がくずれた時に、机は下にすきまをつくってくれるでしょう。だからTちゃんはこの三角のすきまで助かったんですが、妹はタンスだから、タンスは妹のうえに倒れて、そのうえに天井が落ちてきたから……。でも、最初は、妹が「Tちゃん、Tちゃん」と呼ぶ声を聞いたらしいんです。もう頭から毛布をかぶってみたいですが、天井がさらにくずれてきた時に「ウツ」という声が出て、それっきりだったみたいです。呼んでも返事はないし、毛布をひっぱっても、びくとも動かなくて。Tちゃんはずっと遺体のそばで泣いていたら、となりのおばさんがきて、逃げるようにいって連れてきてくれたんです。

〈孤児、語り手は伯母〉

(3) 震災による親の死は、子どもをかばって、あるいはかばおうとして、また子を気遣いながら迎えた死が多い。今回の阪神・淡路大震災は、早朝、家族がひとつ屋根のしたで多くは眠っている時に起きたので、その事例が増えたのだろう。典型的な例は、親が子どもの身体のうえに覆いかぶさり、落下物の直撃を受けて死んでいる。このような親の死にかたは、生き残っ

た子どもに、すまない、私のために親を死なせたという罪悪感、自責の念をもたせる。

事例 グラグラツときた時、私は娘をかばうように覆いかぶさり、夫はその娘と私をかばうように覆いかぶさったんです。そしたら、その上から、屋根の重みを支えるための「はり」が折れて落ちてきて……。私は午前六時に人が助けに来てくれるまで、胸からひざが全然動けない状態でいたんです。(中略) 主人は最初ちよっただけ喋っていたんですけどね。別に苦しがつているという訳でもなくて。私もまさかと思っただしね。(妻子は救出されたが、夫は死亡していた)。

〈母子家庭〉

(4) 家族の死を心理的に受容することができない事例が多くみられた。その死の事実をいっおう認知しているのだが、完全に現実として受容することができない。残された家族のなかでその死を話題にすることが避けられているのはその典型例である。家族の死について残された者たちが話し合い、悲しみを共有するところから心理的回復ははじまる。死者の死を納得し、別れるための工夫はいろいろおこなわれている。

事例 長女とは震災の時の話をたまにします。思い出して泣いたりしています。死んだ妹や弟のことも話します。お父さんや妹、弟が死んだことをまだ実感していかないような感じもあります。もちろんわかっていると思いますが。この子が(いっしょに生き埋めになっ

ていて）父親の最後の言葉を聞いているんです。「もう、あかん」といって、最後に手をはたしてきたそうです。

〈母子家庭〉

(5) 震災による父親か母親あるいはその双方の死亡を中心にしたさまざまな体験は、遺児の心に深い傷を残す。その心の傷の第一類型は、そのような傷がないかのように振舞っている子どもの場合である。かれらは実はその傷をあたえた体験の記憶から逃げまわっており、そのために残された家族のあいだでもそれを話題とする会話が避けられている。表面は明るくタフに生きているようにみえる。しかし、内面ではかれらはその体験の記憶にとらわれている。心の傷は長く残ると思われる。

事例 地震のことについて家族と話すことはほとんどありません。娘はしっかりしているん

ですが、小学校六年になる息子がちよつと心配ですね。(中略)地震のことは早く忘れた
いみたいです。悲しみを隠して元気に振舞っているのかな。でも、地震のことや(亡く
なった)妻のことを話そうとすると、どこかに行ってしまうんです。どうしても親戚と
かが、地震の時の様子を聞きたがりますよね。でも、そんな時、息子は逃げてしまいま
す。

〈父子家庭〉

(6) 心の傷の第二類型は、震災で親が死んだことへの後悔、自責、罪悪感、悲哀、喪失感などである。(3)で述べたように、今回の阪神・淡路大震災では、親が子をかばって、あるいはかばおうとして、また子を案じつつ死亡したケースが多かった。そのケースでは、遺児たちは親にすまないと思い、親は自分のために死んだという気持ちを持ちがちである。また深い悲しみのゆえに自罰的になり、親の死を自分のせいだと悩む遺児もいる。さらに一般的にいつて、遺児たちは、親の死によって心の拠り所をなくしたという深い喪失感に襲われている。

事例 娘も息子もこの地震で怪我はなかったのですが、精神的にかなり落ち込んでいます。とくに息子は地震のことに対してはなにも話しませんね。あの地震が起こる日の前日、息子が大学の用事とかで妻に「六時に起こして」と頼んだ。(妻は)いつもなら教会にゆくんですが(息子を起こすために)次の日ゆくのを止めたんです。それである地震が起きてしまって(妻は死んだ)。息子はかなり自分を責めているようです。自分があの日、頼まなかったらって。

〈父子家庭〉

(7) 第二類型がどちらかといえば年長の遺児たちに多くみられるのにたいして、第三類型はどちらかといえば年少の遺児たちに多くみられる。それは地震体験に由来する恐怖感、怯えなどである。風が吹いて家屋がゆれるだけで地震かと震える。救急車のサイレンを聞くたびに地

震かと怯える。暗い場所、狭い場所を怖がる子どもには、生き埋め体験があった。地震のあとしばらく喋れなくなった、眠るとうなされる、など。

事例

娘はいままで息子と遊んでいたので、主人よりも息子がいなくなって淋しいと思います。まえより怒りっぽくなって、文句が多くなって。エレベーターに乗れなくなってね。二十階だと「お母さん怖い」って。でも他の人が乗ってくると安心して乗るの、公衆便所も、まえはひとりできつとっていたのが、いまは「一緒にきて」って。ああいう狭い場所が怖いんでしょね。(この娘は父親といっしょに生き埋めになった体験があり、父親は死亡した)。

〈母子家庭〉

(8) 第四類型は、心の傷を示唆するさまざまな反応である。持病のアトピーや喘息がひどくなった。登校拒否になった。精神的不安定になった。ふさがちになった。親子げんかが増えた。生活費の心配をするようになった、など。子どもの心理的緊張にたいしては、親子のあいだの率直な話し合いが効果を奏する例がみられた。

(9) 遺児たちは親を失うと同時に、災害による被害者になる。ショックから立ち直れず閉じこもったままの遺児もいるが、積極的に新しい環境を受容する遺児もあらわれる。かれらは生

活の再建に取り組み、住む場所を確保したり、生き残った親や兄弟を励ましたり、家事を分担したりする。

事例 高一の長男が二カ月くらいまえに、ぼろっと(仮設住宅について)「お父さん、狭い家の生活もええなあ」といった。子どもなりに家族のことを考えてくれるんかなあと。震災後、長男は、きょうだい全員助かって、母親ひとりだけが死んで、警察にも自分が代表で受け答えせなあかんかってん。朝もちゃんとひとりで起きるし、少しずつ成長している。

〈父子家庭〉

(10) 遺児のなかには、時間の経過にともない、沈黙や逃避の時期をこえて、震災体験や親しい人たちの死によって引き起こされた悲しみや辛さ、恐怖といった感情に向きあえるようになる子どもがいる。こうした、自分の身にふりかかった災難を客観視する時間を経て、震災体験はその子どもの人生についての考え方や取り組みの変化を引き起こす。

事例 息子はね、やっと二十歳になって父親の大きさに気付いて、これからやって思っていた矢先に逝ってしまわれたんですからね。あの子にとっては、しんどかったみたいですね。集中できなくなって(大学でも自分がとっている授業と)全然違う授業に出ていて、しばらくして気付いて、びっくりしたり。物もすごくよく忘れてね。こんなになるとはね。

いい意味でも、悪い意味でも、すごく成長しましたよ。悩んだり、考えたりしたのは今回が初めてで、すっごく悩み、苦しみ、葛藤が凄かったみたいね。「生きる」ってことに関する本を買ってきて。

〈母子家庭〉

(11) 震災体験として語られたものは、その時の恐怖の体験がもつとも多い。その具体的な状況には個別性がみられるが、生き埋めの恐怖と目の前で家族が死んでいくという恐怖が目立っている。生き埋めの恐怖には、迫りくる死、焼死、孤独といった内容が、目の前で家族が死んでゆく恐怖には、自分の無力感や切迫感が、あいともなつて語られている。また、地震の発生が早朝で、しかも一瞬のうちに家屋が崩壊したので、なにが起こったのか事態が把握できなかつたというケースが多くみられた。

(12) 震災による恐怖の体験は、その時のものだけでなく、人びとの生活に短期あるいは長期にわたつて大きい影響をおよぼしている。それは肉体的にあらわれたり、心理的にあらわれたりして、生活の再建にとつての障害のひとつとなっている。

事例

ドカーンと爆弾がガス爆発みたいな音がしたと思つたら、急にいっぺんに崩れてきて、埋まつてしまいました。どのくらい埋まっていたかわからへん。出れなくなつて窒息し

て死ぬな、完全に出れないと思った。釘が（体に）いっぱい刺さっていたんで、ずっとお腹まで切れてるんやけど、必死になってもがいているうちに、どないしたんか僕もちよつとわからんけどね、とにかく出れたんですわ。いまは平気になってきましたけど、初めは地下鉄に怖くて乗れなかつたんです。（乗ると）ひどい頭痛もするし、吐き気もしてくるしね。精神的な面も（身体の回復には）関係あるんちゃうかって医者もいうてね。自分もうちよつとしっかりしないと。まあ（精神的に）立ち直るのが一番先やなと思っうてはいるんですけど。

〈父子家庭〉

（13）人びとは震災によって辛い体験を強いられるが、他方、近隣や見知らぬ人から援助をあてえられ、日常生活では見失われがちな近隣のネットワーク、ゆきずりの人びととのネットワークの重要性を実感している。

事例 近所の神戸大の寮生が何人か応援に来てくれました。そのうちの体の小さい学生が、くずれた家のすきまから入ってくれて、下の子の足をみつけてくれたんです。さわつてみると、足が動いて「生きています」ということで、すぐ上の物をはがしていったんです。その学生が、このへんどけてと指示してくれて。みんな疲れきっていて、どうしようもなくて、半分あきらめかけていたから、本当にありがたかったです。結局、助けたのは

六時間後でした。

〈父子家庭〉

(14) 震災という自然現象がもたらした不幸は、それが突然であること、加害者として責める対象がないことを特性としている。それは残された人びとによりいつその不幸をもたらしている。不幸の受容のしかたには多様性がみられる。自罰や現実逃避のケースでは、生きてゆくことの意味がいまなおみだせない場合が多い。幸福を相対的な比較のなかにみつけ、それによって不幸感を緩和しようとしているケースでは、自分が生きてゆくことの意味をみつけ、不幸は不幸として受容する姿勢がみられる。

事例 私が春休みに避難所にボランティアにいった時、五、六歳の男の子とおばあちゃんがいて「ぼく、お父さんとお母さんとお兄ちゃん死んじゃった。おばあちゃんとおぼくと二人しかないの」というのを聞いて、家族全員が助かった人からみれば私はいそいそな子だけど、その子からみれば幸せだと思った。へこたれたら、ダメだと思った。

〈父子家庭〉

(15) 震災遺児家庭において、残された家族は、死んだ家族について深い喪失感を体験している。その喪失感、中高年期の人が配偶者を失った場合、とくに深刻である。この喪失感から、

子どもを心の支えとして、あるいは子どもに励まされながら立ち直る親もいるが、自罰感にひきこもって立ち直りのきっかけを失っている親もいる。

事例

私も、いままでやったら、普通、女が長生きするから、妻や子どものために、これだけ貯金しておこうとかの生きがいがあったけど、そんなものがすべてなくなつて、生きがいがなくなつてしまった。私はもう五五歳で、これから家族をつくることがないんだからね。家族旅行にゆこうとか、そんなことがすべてなくなつてしまった。〈父子家庭〉

事例

家具は全部こわれましたから、持ち出した物はなにひとつありません。いまの私の心の支えは子どもですね。子どもがいなかったら、とてもじゃないけど、生きていけません。がんばつてますという顔ができるのは、子どもがいるからです。こういう状況じゃ、神も仏もないと思いますけど、一応おがまんしやあないですから。先祖とかにもちゃんとしています。〈父子家庭〉

(16) 震災による親の死は、家族・親族の形態とコミュニケーションのありかたに大きい影響をあたえている。解体の進行と統合の強化。いずれも震災以前から潜在していた傾向が顕在化したケースが多い。また、父子家庭の父親には、配偶者の喪失の打撃、それまで子どものことを母親まかせにしていたことなどにより、子どもとのコミュニケーションがうまくゆかず、悩

む者が多い。これは、子どもの心の傷を話し合うことで癒すのを難しくしている。

事例

相続は放棄したんです。主人も早くに父親を亡くして、母一人子一人で育ってきたんですね。それまでもちよっと家庭内がごたごたしていたので、主人がいてちよっどバランスがとれていたというのもあるんですよ。まあこれは私の勝手かもしれないし、世間からみたら無責任やっついわれるかもしれないですけど、子どもも小さいですし、私たちがまだ先は長いから、いまの目先の生活を考えるんじゃないかと、将来的になにがベストなんかなくて考えた時に、じゃあ店や土地の権利を放棄するかわりに、申し訳ないけど独立して生活をさせてくださいというふうにしたのですね。だから主人の母とも連絡をとっていないし。

〈母子家庭〉

事例

育児はほんと難しいわ。(中略)子どももかわいそうやと思うわ。大人でもこんなに滅入っているのに、なにかもしんどくて、一緒に逝けたらどうか。嫁と一緒におらんかったでしょ、仕事してたから。そういうことがどうしようもないのにくやしくてね。子どもとそんなに接してないから、どう接したらいいのか。本当にいままで嫁にまかせっきりやったもんで。

〈父子家庭〉

(17)

ボランティアにたいする反応はほとんどが肯定的であり、その活動は高く評価されている

た。ボランティアによる物品の供給やサービスの提供が役に立ったということにあわせて、孤立し困窮している時に、他人の善意や援助に接することによる心理的力づけがくりかえし強調されていた。また、ボランティアの奉仕に感謝して、今後ほかの土地で災害が起こった時には、自分もボランティアとして出かけてゆき恩返しをしたいという決意表明が少なからずあった。

(18) あしなが育英会の活動にたいする反応もすべて肯定的であった。評価された活動は、行政に先んじた素早い調査活動、訪問調査によって被災者の心を開かせ、自己を客観視する機会をつくったこと、つどいで遺児たちに心理的力づけをおこなったこと、援助にあたって行政に比較して手続きが比較的容易であったことなど。

事例 あしなが育英会の調査・訪問は、良いことだと思われ、大切なことだと思っています。

(被災者の)なかには、自分のなかに閉じこもったままの人もいますからね。そういう人たちには、話をするということが必要だと思えます。自分を客観視できますし、そういう意味で本当にありがたいと思っています。

〈母子家庭〉

(19) 震災後の行政サービスにたいする反応は、約半数がつよい批判的調子をおびていたが、公務員も同じ被災者なのだからという同情論や、良くやってきているという評価もみられた。

行政への批判が集中したのは、生き埋めになった人びとへの救出活動の不充分さ・おくれ・連絡の悪さ、検死活動のおくれ、消火活動の不充分さ、罹災証明をもらう時の調査の不充分さや被災者をうたがう態度、義捐金の支給や保険証の発行にさいしての手続きの煩雑さ、公務員の態度の悪さなど。

事例 最初の神戸市の調査はまずかつたんじゃないかな。私が罹災証明をもらう時、住所を言つて「ぼくの所は全壊ですからお願いします」といつて書類を出したら、地図を広げられて「お宅は異常ありません」といわれました。そんなの、だれが調べたのかと思ひました。（事実は住宅全壊、母死亡）。

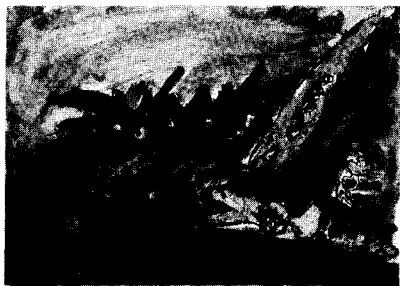
〈父子家庭〉

(20) 震災後のマス・コミの取材活動については、少数の例外をのぞき、つよい否定的判断が一般的であった。ステロ・タイプの記事の報道内容、救出活動を妨害した取材のためのヘリコプター飛行の爆音、被災者のプライバシーの侵害、オウム真理教事件が起こると関心をそちらに移し、震災報道をしなくなつてしまったこと、などが批判されていた。

事例 人の暖かさとかというところけど、現地は凄かったですわ。地域のローソンはほとんど市民に荒らされているし、外国人との衝突とかも報道されていない。病院に水泥棒が入つた、中学生がしのび込んで数百万盗んだとか。

〈父子家庭〉

第六章
あしながファミリー
神戸日記



小島勝人くん（小3）・絵



あしなが育英会、ボランティアの活躍はそのつどマスコミによって紹介された。

震災遺児を一人も見落とすな

大震災四日後、現地に立つ

平成七年（一九九五年）一月一七日午前五時四六分 その時、あしなが育英会本部の関西地域担当、樋口和広は、東京・三鷹の下宿で、ひとり眠っていた。出勤前、いつものように七時のNHKのテレビのニュースを見る。

「関西で地震が、死者は二、三人……」

たいしたことはなさそうだ。JRでいつものように東京都心のあしなが育英会の本部オフィスに向かった。

あしなが育英会は災害、病気遺児に奨学金を貸与すると同時に奨学生の教育とケアをする民間の育英団体である。その資金は、定期的に寄付する教育里親「あしながさん」や交通、災害、病気遺児の学生らが中心になったボランティアによって支えられている。そのため、十人近い男性職員は、全国の奨学生との絆を保つため、地域別に担当を定めている。北海道、

東北、首都圏、関東、中部、関西、中・四国、北九州、南九州の九つの地域だ。樋口は、関西地域での募金、奨学生の教育やケアのため、一カ月に二、三回は、関西地区へ出張する。

「昼のニュースを見ていた女性職員が叫んだ。

「神戸は大変よ、死者が千人を超えそう」

樋口はテレビを横目に、すぐに阪神地域の奨学生に電話をかけるが、もう通じない。手紙を書き始めた。

「とにかく連絡をください、支援します」

奨学生だけでなく、なじみのボランティアの人びと、あしながさんは、どうしているだろう。六、七十人の関西地域の人びとの顔が浮かぶが、どうしようもない。

同一八日 関係者の安否確認の電話がけを始める。電話はつながらない。

同二〇日 巨大地震の被害は、関東大震災（一九二三年）に匹敵するのが、はっきりした。

玉井義臣会長代行は、この運動を支援してくれた人びと、奨学生全員の安否の確認を決定して、樋口に「あすから災害地へ行け」と指示。樋口は航空券を手配、携帯電話も確保した。夜中は結構電話が通じるようになっていた。ボランティアのネットワークもつかまった。田中敏職員が、同行。

同二一日 晴れ、寒かった。朝八時半に満席の臨時便で関西新空港に着く。田中はフェリーボ

ートで、ポートアイランドに向かう。樋口はJRと阪急を乗り継いで西宮北口駅に到着。午後一時過ぎ、西宮北口駅で原島由紀と会う。

原島はオーストラリア沖の漁船事故で父を亡くした災害遺児。高校時代から奨学金を受け、今年三月、西宮にある武庫川女子大を卒業予定だった。その日、加古川の実家にいて無傷だったが、大学近くの下宿は本棚や家具が倒れるという惨状を示していた。

あしなが育英会の職員と、奨学生の間には兄弟と云っていい連帯感がある。全男性職員が交通遺児であり、災害遺児の原島にとって、みんな他人とは思えない間柄なのである。駅前が集まった男性六人、女性一人のボランティアは、そんな絆で結ばれていた。すぐあしなが関連の被災者捜しが始まった。薬師淳（交通遺児・大学奨学生）は、実家が半壊。近くの小学校に非難していた。母親も無事だった。大阪で買ってきたパンやお茶を差し入れた。原島は恒例のPウォークに、車椅子で参加してくれた人の家をたずね、貼り紙で無事を知る。

樋口は、西宮市役所に電話で、

「なにかお役に立つことはないか」

とたずねた。

「とくはない」

市役所も動転しているのだ。西宮北口駅前の商店街は両側がペシャンコだ。

「後片づけのため商店街の通り抜けは、やめてもらいたい。封鎖したいのだ、手伝ってくれ」と、店主たちに言われ、樋口ボランティアチームは見難客や通行人を誘導した。陽は落ちて寒さが身にしみる。今夜は、どうやって過ごすか。

育英会一五年のネットワークは、意外な出会いをもたらす。樋口が交通整理中に、遺児の先輩の山口哲一から声をかけられた。

「どこに泊まるのか、おれの家（大阪・茨木市）に來いや」

あしなが育英会、奨学金特例措置を決定

一方、田中は、かつて兵庫FM放送局にインターン勤務をしていたこともあり、神戸市内の地理には詳しい。フェリーを降りて、中突堤からJR三宮へ向かった。市街戦のあとのよなビル街、難民のような人の流れを抜けて、避難所になっている小、中学校で活動するボランティアの姿を見つけてはインタビュー取材。合わせて、奨学生やあしながさんの安否をたずね歩いた。樋口とは、携帯電話で連絡を取り合うだけで、近くにいながら会うことはなかった。

樋口は、大阪在住の奨学生OBたちに、車の確保を頼む。冷凍食品会社勤務の小亀裕司が翌二二日の協力を約束してくれた。どうやらボランティアに機動力がつきそうだ。

あしなが育英会本部から指示がきた。

「長年の支持者で、機関紙の常連寄稿者、津田康（新聞記者）を捜せ。居住地近くの神戸市立御影工業高校に避難しているらしい」

同日、東京のあしなが育英会は、理事会で今井靖理事（学生募金OB会会長）の提案で、「阪神大震災遺児への奨学金特例措置」を決定した。進学と学業継続のために必要な奨学金や入学一時金を貸与するという、震災遺児だけへの特別優遇制度だ。

「やれるだけのことをしてください」

と、あしながさん代表の山田規矩子理事。

同二二日 雨。ボランティア第一班は樋口、小亀、原島、金場崇能（災害遺児・大学奨学生。

以下「大発生」）津田記者は、他所に避難したのか発見できず。手分けして東灘、灘両区のあしながさん宅を訪問。みんな無事だった。

「六甲山寄りの山手にあり、しっかりした造りの個人宅は、やはり安全度が高いのだな」と樋口は感じた。

第二班の林田聡（交通遺児・大発生）、高木克久（同）JRで三田^{さん}經由で神戸へ。新神戸で田中職員と合流して、あしながさんの安否をたずねながら、ボランティアで被災者の手助けをする。

第三班は三好滋（病氣遺児・大奨生）、宮崎信一（交通遺児・大奨生）、庄司英永（災害遺児・専門学校奨学生）、神田友紀子（交通遺児・大奨生）Ⅱ西宮北口前で、道案内の他、西宮市内の避難所で、救援物資の運び役のボランティア。

東京本部でも、関係者の安否確認電話に拍車がかかる。

機関紙を通して惨状を訴える

樋口は、機関紙「NEWあしながファミリー」の取材もしなければならぬ。締切日ぎりぎりだ。被災者はメディアに冷たい目を向け始めていた。

玉井の避難所写真要請に樋口は一度は断ったが、事実を知らせるためと自分の感情を押し殺し、胸中で「スミマセン」と言っ、一枚だけ撮った。

御影工高、御影高、御影中と、あしなが名簿を手に入れたが、誰も見つからなかった。しかし、滋賀県野洲での「つどい」で顔なじみになった高校奨学生、福島功児の一家は、マンションで無事なのを発見した。それでも今度余震がきたら、母子三人で一緒に死のうと話しているのを耳にして、励ましの言葉が出なかった。

同二三日 曇り時々しぐれる。東京から山崎敏史、濱田剛（ともに災害遺児・大奨生）が応援に着く。阪急西宮北口から、御影まで国道二号線を二〇キロ、樋口とともに歩く。五時間、

誰も口をきかなくなった。津田のひび割れマンションにたどりついた時には、へたり込んだ。二度目の訪問に津田はいた。書架が倒れ、蔵書の下にある貴重品や入れ菌を捜していた。学生二人で夜までかかって整理。また、大阪方面へ戻るのに歩き始める。ボランティアは日暮れとともに帰る。夕方の国道は大阪方面へ歩く人の列だった。

携帯電話が鳴った。

「東京に戻ってこい」

同二四日 月刊の機関紙の締め切り日なのだ。新幹線からあしなが育英会の事務局に直行。

「神戸って、すごいんですか」

「四千人以上も死んでるんだってね」

と、東京の事務局職員が、樋口にたずねる。現場を知らない東京との格差を実感して、樋口は怒りを覚える。

同二五日 機関紙づくりで徹夜。ボランティア奨学生原島に東京に来てほしいと指示が出る。なぜ災害現場でボランティア活動中の樋口らを東京に呼び戻すのか。

あしなが育英会は、独自の広報戦略を持ち続けている。玉井が設立以来専務理事として指揮した交通遺児育英会で成果を上げた広報戦略の継承である。機関紙の記事を書くのも、レイアウトを作るのも、配布するのも、すべて事務局職員がやる。徹夜になることもしばしば

だ。実際の版組、印刷は、印刷会社がやるが、ゲラ刷りでの手直しは、印刷会社に職員が向いて仕上げる。

樋口も田中も、ボランティア活動の汗と涙と悩みを記事や写真で表現する。その機関紙は毎月三万七〇〇部。配布先はもちろん奨学生の家庭、支援してくれるあしながさん達だが、マスメディアにも送られる。新聞社、テレビ局、雑誌社、支援してくれる企業や友好団体や個人にも郵送される。

メディアにいかにも有効に働きかけるか——それは、運動のリーダー、玉井が、朝日ジャーナルの記事やテレビ朝日の「桂小金治アフタヌーンショー」で交通事故や交通遺児が抱える問題を社会に訴え、成果を挙げた実体験からの戦略である。

同二七日 玉井は震災地を訪れる。大阪出身の玉井は親類や知己が多く、二九日まで泊まり歩きながら、ボランティアが活動した中央区、東灘区や芦屋市、西宮市などの実情を見聞。交通遺児奨学生の林田聡が同行した。スニーカーにデイバッグ姿だったが、足元のよくない被災地を歩くうちに持病の腰痛がふり返す。

メディアに見捨てられた震災遺児を捜せ！

同三〇日 あしなが育英会は『震災遺児奨学金特例措置』を記者発表。原島は同じ席で『子ら

を激励する募金』を全国に呼びかけた。

巨大地震から、ほぼ二週間。死傷者の収容、道路や鉄道網の復旧という、表面的な出来事のレポートに追われていたメディアにとって、遺児問題までは関心と手が回らない状態だった。育英会の行動にニュース性はあった。NHKは深夜の震災報道で、テロップで支援機関を流し続ける。「奨学金」に日本育英会とあしなが育英会の字が毎夜何回も流れた。

同三一日 新聞やテレビは、巨大地震による遺児が「一一〇〇人」と伝えた。あしなが育英会が依頼した副田義也筑波大教授（社会学）の推計調査によるものだった。

しかし、育英会として遺児救援を打ち出したものの、実態を完全には把握していなかった。どこに、どれだけの遺児がいるのか——玉井を含め、職員も見当はつかなかった。

二月七日 あしなが育英会の事務局長、山北洋二、職員の伊藤道男、桑野公孝のチームが西下した。出願書類をもって、兵庫県、神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市などの教育委員会や学校をまわる。奨学金特例措置のPRと奨学生募集の依頼のためである。泊まることなくテントで過ごした。

同一〇日 山北は、津田記者のマンションそばにある神戸市立御影工業高校の進路指導室を拠点として活用させてもらう話をまとめた。どの学校も校舎、グラウンドが避難先になっていた。同夜、職員の八木俊介、小河光治、岡崎祐吉の第二チームと交代した。

同一日 メディアで震災遺児への特別奨学金制度ができたのは紹介されたが、新聞やテレビにも接することができない被災者は少くない。小河らは、自分たちで高校などを訪問して、資料やビラを配りながら、震災遺児を捜し出し、実数を知らねばならないと思い、学校や避難所をまわり、遺児を捜した。プライバシー保護のため学校はなかなか教えてくれない。四日間で九五人の遺児は判った。

神戸事務所の開設とローラー調査

同一日 このままでは全遺児の発見は不可能と判断し、「ローラー調査」に踏み切ることを決定。育英会東京本部では、ただちに、新聞に載った全死亡者名簿をもとに二〇歳から五九歳の男女全員を「遺児が生まれたかも知れない」として、名簿を作った。職員の柳瀬和夫、若宮紀章も加わり遺児捜しを続ける。一方で、一八、一九両日、樋口は全国での激励募金の一環として、ボランティア達とJR大阪駅前での募金準備に走り回っていた。夜は御影工高の廊下で寝た。寒かった。救援物資のメシをくいながら、これでよいのか、メシぐらい自分で調達しなければ……と思ひ悩む。

山北や樋口らも、被災者と同じ差し入れ弁当を食べることもあった。いつまでも高校の教室に在るわけにもいかず、樋口達は白前の拠点捜しにとりかかった。電柱や避難所の壁は貼

り紙だらけだった。そんな中で「貸し事務所あり」のビラをみかけた。

同一八・一九日 『震災遺児激励募金実行委員会』は全国主要都市六七カ所で約二六〇〇人の学生、一般市民らが街頭募金を実施した。北海道、東北は降雪。渋谷では米国GE日本支社のボランティアグループから一〇〇万円の寄付もあった。

同二四日 御影工高から二区画先の国道二号線沿いに貸事務所をみつけた。タクシー会社オリエンタルがオーナーで、休業中の喫茶店跡だった。樋口は交渉に入った。社長は不在だった。応対の女子社員が言った。

「ああ、あしながさんね。知ってますよ、ご苦労さま。社長に言っておきます」

「なんとか貸してください。お願いしますよ」

後刻、たずねた。社長は渋り気味だったが、契約できた。後にあの女子社員は言った。

「社長は冗談でもっとよい客なら……と言ってたんです。でも、貸すことにしたと社長が社員に告げた時、みんなから拍手がおきてね……」

社長は神本完一氏。三月いっぱい無償でよい、との好条件だった。

同二七日 喫茶店跡へ移転。客用のボックス席が三区画。ボランティアとの打合せには使い勝手がよかった。カウンターやタナも、そのまま使えた。トイレもきれいだ。遺児捜しローラー作戦にエンジンがかかる。

奨学金を出すだけでは終わらない

「あしながボランティア神戸本部」と命名された。樋口は、壁に神戸市を中心にした震災地の地図を貼った。今日は東灘区本山中町、あすは同区魚崎北町……というように、震災遺児の有無をしらみつぶしに捜す。被災者の住所別の地図コピーを手になぞね歩いた。一日の作業を終えて、ボランティア本部に戻ると、その日捜し歩いた地区を色鉛筆で塗りつぶした。次第にピンク色のマークが真白な地図に広がっていった。遺児学生だけでは手が足りないの
で『阪神・淡路大震災被災地の人々を応援する市民の会』（早瀬昇事務局長）から、一般学生と市民のボランティアの応援を受ける。

三月に入ってもローラー作戦は続く。一回目の遺児捜しでうまくいかなかった地区には二回、三回と足を運ぶ。メディア側も遺児捜しを続けていた。同情と関心と呼ぶニュースとしての価値があった。メディアは典型的な少数のケースを取材すれば、記事や番組にはなる。しかし、あしなが育英会は全員を捜し出さなければ意味がない。奨学金を貸付けるという目的がある。

激励募金は総額で一億一六七七万円に達し、三〇〇〇通の励ましのメッセージも集まった。全国の「ろうきん」（労働金庫）が震災遺児支援定期「エール30」で三〇〇億円を集め、約二億円をあしなが育英会に寄付すると発表。百万の味方だ。

三月一〇日 震災遺児二〇人にはじめて奨学金を送金。

山北、小河職員らは、市役所、区役所、警察に出かけて、遺児情報を得ようとした。冷たい対応に出あうこともあった。住民票の閲覧窓口で、死亡者の家族関係を調べようとする、断わられることもあった。しかし、あしながの遺児奨学金を聞き知っている区役所職員達の個人的好意で閲覧が許され、ボランティアたちの疲れは一度に吹き飛んだ。

同一六日 神戸のボランティア本部で、ローラー作戦の一員、小河職員が記者発表をした。五〇四人を確認。延べ八八一人のボランティアが一七〇〇世帯を訪問調査した。NHK午後七時の全国ニュースで流れ、同夜九時半の「クローズアップ現代」で三〇分間全国放映された。翌一七日の新聞朝刊でも掲載された。NHKの取材チームは、ローラー調査に同行する形で、あらかじめ映像化していた。

樋口も協力した。

「遺児家庭の多くは、そつとしておいてほしい、と言う。私もそう思う。が、世の中に知らせ、もっと遺児家庭を見つけるために、テレビカメラの同行を認めてもらったのです」

このころ樋口と八木は、奨学金を出して終わり、というわけにはいかないぞ。震災遺児を全員捜し出したのではないし、もっと奨学金を活用してもらうには、神戸に腰を落ち着けなければ……と話し合うようになった。

同二五日 玉井は、理事会で、神戸事務所の常設をはかり、決定。

『阪神大震災遺児と共に生きる会』発足

同二六・二七両日 六甲山系の向うにある有馬温泉で『震災遺児を励ますつどい』を開く。遺児の親子九六人とボランティアの交通遺児学生ら五三人参加。代表は駿地真由美（病氣遺児大奨生）、関西の三三五地区ライオンズクラブが経費全額を出してくれた。この日までのボランティアは延べ一三〇八人になっていた。この時から自然的に『阪神大震災遺児と共に生きる会』が誕生。

有馬の湯は、避難所や仮住まい暮らしの親子にとって、あの大地震以降、はじめてひたれる湯だった。

「あれ以来、カギのかかる部屋で、親子がゆっくりするのははじめてよ」

という声に、ボランティアもあしなが職員も胸を打たれ、改めてやりがいを感じた。

自らの遺児体験を生かし、心のケアを…

四月一日 正式にボランティア本部があしなが育英会神戸事務所としてスタート。山北は所長（東京勤務）、樋口が所長代理、八木職員と二人が常勤へ。

同一七日 樋口と八木、赴任。

同二六日 震災遺児作文集『とってもくやしい』発刊（宮崎信一編集長 樋口交通遺児）。

同二八日 六甲アイランドにオフィスがある米国系の生活関連メーカー、P & Gが遺児奨学生に世界一五〇カ国の一〇万人の社員の寄付金四万ドルを、贈ってくれた。

同二九日 ゴールデンウィークが始まったが、たった二人の神戸事務所は休む間もない。二人は大阪市内に下宿住まいだが、遺児家庭のゴールデンウィークの過ごし方を聞こうと、連絡名簿を片手にボランティアと電話調査をした。結果は、

・どこへも行けなかった 〓 四六%

・日帰りで出かけた 〓 三二%

独身の二人は、近くの弁当屋「かまどや」の常連となった。ボランティアたちも世話になった。いつも笑顔で、

「予算はいくら。適当にみつくりつつあげるから」

と店長格のおばさん、山端英子は、心暖かいサポーターだった。そのおばさんも全壊の被災者だった。

五月一日付の機関紙から「神戸事務所だより」が載ることになった。樋口が、八木とも相談してワープロをたたく。日ごろ、気づいたことをワープロに打ち込み、あとでならべかえ

て、ひとつの文章にまとめる。

二人の職務分担は、樋口が渉外、マスメディア担当。八木はボランティアの学生、主婦、OL担当。春休みが終わって、学生ボランティアは減り気味。一方、遺児家庭へは、息の長いケアが必要でボランティア不足が深刻化してくる。

二人は八〇人を超す遺児家庭の訪問、ケア。寄付金の受けとり。チャリティコンサートでの感謝の挨拶と週末も休む間はない。

八木は小学校五年の時、父を失った自分の体験から考える。

「もし、事故の直後、育英会の人に会っていたら、心の揺らぎは少なかったかもしれない。経済的な支援はありがたいが、心の支えは、もっと重要なかもしれない」

八木は育英会職員になってから、遺児と家庭には二つの型があると感じるようになった。

「放っておいてくれ」の拒否型と「よく来てくれた。話し相手がほしかったよ」の受け入れ型である。自らの遺児体験を生かして、心のケアまでやりたい。どうしたら拒否型の心を和らげられるか、と思い悩みながら、家庭訪問を続ける。

第七章
ボランティア奮闘記



西田まい子ちゃん (中1)・絵

人生観を揺さぶる学びの場

大阪ボランティア協会理事事務局長 早瀬 昇



ボランティアに指示を出す早瀬（中央）。

阪神・淡路大震災は今も被災地に大きな傷痕を残しているが、この未曾有の災害で唯一の光明といえるのは、多くの市民や学生が自発的に救済復興活動に参加したことだろう。その活動は華々しく、今年を「ボランティア元年」と呼ぶ識者も出てきた。

今回の震災でボランティア（その多くが生まれて初めて活動に取り組む若者たちだった）が大きな役割を果たせたのには理由がある。というのも、まず災害救援においては実は専門的技術がなくて

もできる活動が多い。また民間ベースでは個々に自由に活動できるがゆえに緊急時に重要な必要即応的な活動が容易だった。それに本人の特技を活かして多彩な活動が展開された。こうしたボランティア活動の特性が遺憾なく発揮されたため、特に震災直後には行政をも上回る機動性と多様性を発揮することができたのである。

そのような中でも「あしなが育英会」に集まったボランティアたち（その大半は今回の震災で活躍が注目された若者たちだった）の活動には、注目すべき多くの特長がある。

まず、その「担い手」だ。

同会で活動の中心的な担い手となり現地で活動に飛び込んだ一般の若者たちをリードしているのは、本人自身が交通事故や病気、災害などで親を亡くした遺児たちである。つまり、震災遺児を支えようという若者たち自身が、かつて突然に親を失った経験を持つ「当事者」なのだ。このことが精神的に激しいショックを受けている震災遺児のケアにおいて極めて重要なことは、言うまでもないだろう。突然の親の死という不条理、深く重い心の傷を癒すのに、上からの同情は逆効果しかもたらさない。一方、かつて同様に親の死という現実と向き合い苦しんだ経験を持つ遺児たちが「共に悲しみを受け止めたい」と関わることは、「援助」というより「協働」という言葉の方がふさわしい活動となり得る。実際、あの困難な状況の中の多くの活動実績を残してきたのも、この「立場」の重みによるところが大きい。震災について語ることを

特に嫌がる震災遺児家庭の七割が調査に応じた、二百四世帯の詳細な面接調査の成功は、「あしなが育英会」に対する信頼の証であり、「立場」の重みを抜きには語れない。

このような活動は「セルフヘルプ活動」（本人による活動）と呼ばれ、現在、最も注目され広がっているボランティア活動のあり方でもある。ボランティア活動とは「強者が弱者に施す」活動ではない。逆に「辛い立場にある（あった）からこそできる」活動もあるのだ。今回の「あしなが育英会」の取り組みは、その好例を示すものでもあった。

次に注目されるのは、活動展開の「ビジョン」だ。

同会の活動は、家庭訪問を土台に、有馬温泉での「震災遺児を励ますつどい」や香住での海水浴など「精神的な癒し」を主眼とした活動と、「激励募金」や奨学資金づくりのための「育英募金」という「生活保障」に向けた活動を二本柱としている。両者のバランスが保った活動展開によって震災遺児の人生を支えようという「ビジョン」は、出色だ。

数多い遺児たちの悲しみの中身は、一人ひとり、みんな違う。その悲しみに応えるには、一人ひとりの話にじっくりと耳を傾けていくことが不可欠だ。しかしこれは、公平性を本質とする行政のもつとも不得意とする領域であり、まさにボランティアならではの取り組みができる領域である。セルフヘルプ的な関わりもあって、この領域で実に深いレベルでの精神的な支援がなされてきた。



話すこと、書くことによって心の傷を癒しつつある子ども達。

しかし、震災遺児の抱える問題は「精神論」だけで済まないところに、その深刻さがある。「自立」までの長期間の生活費、特に教育費を確保しなければ、学歴や就職時の困難など、一

次的な被災被害を招くことになりかねない。それを防ぐ奨学金制度の充実に向けた取り組みが並行してなされてきた。同会の活動は、この「両面作戦」で進められてきた。

あの混乱した状況下で震災遺児を探し出した「ローラー調査」は同会の前身である交通遺児を励ます会や交通遺児育英会などで蓄積されてきた活動のノウハウであった。遺児の思いを作文集として「形」にし、面接による実情調査で問題を客観的に把握し、従来から連携してきたマスメディアに向けて発信するといった方法論も、同様に長年の取り組みの中で整理されてきたものである。緊急時の努力でも、積み重ねが結果を左右するのである。

通常、「ノウハウ」という言葉には、通俗的で軽薄なイメージが伴いがちだ。しかし、どのような高邁な理想も、その目標に至る具体的な戦略を持たねば実現できない。「あしなが育英会」は、そうした活動展開の「専門性」をも合わせ持っていると言える。

これらの特長を活かし、急激に事態が変化する難しい状況の中で、「あしなが育英会」のボランティアたちは、重い課題の解決を少しずつではあるが着実に進めていると感じる。

しかも、この取り組みは、ボランティアたち自身の深い学びの場となり、また生きることの意味、喜びを知る場ともなっている。ここで一々、再掲することは控えるが、ボランティアたちの手記には、具体的な出会い、体験を通じて人生の深みと広がりを知り、自身の人生観が揺さぶられる感動が切々と綴られている。

これは、あらゆるボランティア活動で生じるものなのだが、今回のように極限的な状況では特に大きく、しかも自身が遺児である者の場合、その意味は特に深い。自分が関わる被災者たちの姿を通じて、自らが今日まで成長してきた過程で気付かずにきた家族や社会からの配慮を発見し、また、人を支えることで得られる充実感を体感していく。

HELPING YOU HELPS ME. (あなたを支えることが私を支える) という言葉がある。「あしなが育英会」はそんな支え合いの輪を広げている。

本当の悩みが聞けるまで

坂井典子（日本福祉大学二年）

私は二月、三月、八月、九月と四回神戸を訪れ、合計すると二十七日間、約百家庭を訪問した。朝食は牛乳とパン、お昼は食べたり食べなかったり、夕食はホカ弁、風呂は我慢して、ボランティア仲間とあしなが育英会の神戸事務所の床にぎっしりマットレスを敷いて眠った日々。夢の中でも家庭訪問していた。

破壊された建物や家屋を見るのはとても恐ろしいことだったが、町で会う人はみんな親切だった。その人も被災して大変なのに、道を尋ねるといやな顔一つせず、中にはわざわざ地図を取り出し、丁寧に教えてくださる方もいた。

家庭訪問して、門前払いもあったが、ほとんどの人が温かく迎えてくれた。特に子ども達にお姉ちゃんと慕われたときのうれしさ。だが、私と話しているときの子ども達はすごく元気で明るいのだが、実は登校拒否をしていたことを後で知った遺児もいた。また、お母さんも私の前では前向きな意見を言うのだが、私の父が病死した時の母の姿から、本当かなと思ってしまふこともあった。私がただ楽しいだけではいけないと、今つくづく感じている。本当の悩みが聞けて何か応えられるようになるまで、これからも何度も会いに行こうと思う。

しようもないヤツだった

林田 聡（阪南大学三年）

私が震災遺児の家庭を訪ねて行き、お母さんと話していると、奥から、誰やろー、とうかがう鋭い視線を感じた。視線の先の子をかばうように、お母さんが話をする。

「子どもはお父さんの話をするのをいやがります」

そんな子どもの気持ちがかかるような気がした。

中三の時、私の父親は交通事故で死亡した。交通遺児育英会から送られてくる機関紙を見るのがイヤで、すぐにゴミ箱に捨てた。遺児が集まる「奨学生のつどい」には、絶対行くもんじゃないと思っていた。近くの雲仙普賢岳が爆発し、大きな被害があったが、ボランティアをしなかったし、親を亡くした人のことも考えられなかった。そんなヤツだった。

勉強合宿をさぼる口実を作るために、イヤなつどいに出席したのが高三。母に変わったと言われた。そーかなーと思うと同時に、そう言われるのがうれしかった。リーダーと手紙のやりとりをし、ちよつとは家の手伝いもし、人の話を聞くようになった。

あれから三年、あしながグループのボランティアの中心的役割をさせてもらっている。

あしながさん安否確認から震災遺児ローラー調査、震災遺児激励募金、有馬温泉のつどい、

作文集第一集発行、あしなが学生募金、奨学生のつどいのリーダー、香住町での海のつどい、震災遺児家庭の訪問聞き取り調査、作文集第二集発行。次から次へとやってきた。

「もーやめた、オレだって休みがほしい」

しんどくて、駄々をこねたこともあった。そのたびに人に支えられ歩いてきた。

支援してくれる人を訪ねた。家は崩れ、土壁でドロドロになった部屋で生活を続ける七十歳位のおばあさんだったのだが

「遺児たちに勉強してほしいわ。私、こんなになつたからもうできへんのが残念やわ」

と言った。こういう人に支えられているんだ、と愛の深さを感じ、感謝した。

震災遺児家庭を訪ねると、子ども達が、

「次はどこでつどいやるの？ やらへんの？ また何かやってーな」

と言ってくれる。信頼関係が突ってきたな、この子らを裏切れないぞ、と思う。

そして、いつも励ましてくれる仲間がいる。

「関西の人間が、それも上級生がやらな、誰がやるんや。誰もやってくれん。しんどーても、

やらなあかんやろー」

しようもないヤツだった自分が、少しは人の心の温かさがわかるようになれた。純粹に感謝できるし、何かせなあかん、ちょっとでもしてあげたいと思っている。

同じ遺児だから言える

原島由紀（当時武庫川女子大学四年、激励募金提唱者）

地震があった時、私は妹の成人式のために加古川の実家に帰っていて難を逃れた。

本当は十六日の夜に西宮のアパートに帰る予定だった。久しぶりに会った母や妹ともう少し一緒にいたい、ふとそう思って、延ばしたのが幸いしたのだ。

私をはじめて被災地に入ったのは一月二十一日。西宮に戻ると、向かいのアパートは全壊、私の部屋は足の踏み場もなく、本棚など、積み上げていたものすべてがベッドの上に山積みになっていった。もし、ここで寝ていたら、と鳥肌が立ったのを覚えている。

私がいとも募金に立っていた西宮北口駅の周辺も商店街は軒並み全滅だった。ついこの前までここに立っていたのにも思った時、募金に協力してくれた人達のが浮かんできた。一緒に街頭に立ってくれたボランティアやご苦労さまと励ましてくださった方々、日々刻々と増えていく犠牲者の中に、あの人たちがいたら……、もし、遺されてしまった子どもがいたら……、そんな思いが震災遺児激励募金に結びついた。

募金は卒業論文の締切り間近だったが、終わるまで卒論のことは忘れていた。私をここまで導いてくださった方々の子ども達が途方に暮れているかもしれないと思うと、卒業論文なんて

どうでもよかった。

また、それが四年間続けてきたあしながボランティアの締めくくりとして当たり前だと思っ
た。

募金が終わって、一学生だった私の呼びかけにたくさんの方が応えてくださり、全国から一
億二千万円の浄財と、三千通もの励ましのメッセージが寄せられたことには本当に感動した。

二月に入って、遺児の所在確認調査をした。一番つらかったのは亡くなった方の家を探して
いる時だった。家を見つけると大抵の家は倒壊していて、見るのがとても恐かった。

「頼むから、この家に子供はいないと言ってくれ」
心の中でそう叫んでいた。

あの子たちに会う時にいつも心がけていたのは、同じ遺児としての共感だった。がんばって
という励ましではなく、同じ遺児だからこそ言える、一緒にがんばろうの一言だ。

入院中のNさんに会えたときはうれしくて、笑顔を見ただけで安心した。

残念ながら卒業してからは、なかなかあの子たちと会うことはできないが、あの時の体験は
今でも私の心に強く刻まれている。今、番組制作の仕事に携わっている私は、取材者である前
に、人として被災者の視点で物事を観たいと思っている。

貧乏人はボランティアもできない

濱田 剛（東京大学二年）

貧乏人はボランティアをすることもできない。これが現状だ。

私は一月二十三日に神戸に入り、テスト期間を除き四月五日まで、長田区蓮池町の避難所でボランティアをした。掃除、物資の仕分け、焚き出し、解体の手伝い、被災者会議の開催などなど、大学では学べない多くのことを学んだ。貴重な体験だったと思う。

遺児の私は、授業料は免除され、大学宿舍は月約八千円。東大生はアルバイトでも優遇されていて、家庭教師は引っぱりだこだ。私は週三、四日はアルバイトをして、親の援助なしで生きている。それでも阪神から帰ってきたら、電話は止められていた。

ところが、災害遺児や病氣遺児の仲間、都内の特に私立学校に通う者は、授業料だけで百万円近い費用がかかり、その他生活費なども考えると、ボランティアなど、とてもできるような状況ではない。

ボランティアに参加するのにもお金がかかる。交通費も弁当もばかにならない。アルバイトができないため、出るだけ出て収入はなし。ひどい場合はアルバイトをクビになる人もいる。同じ遺児の仲間に、ボランティアをしたいが、余裕がないと悔しい思いをしている人がおり、

とても忍びないし、社会的に見ても損失だと思う。

私は大学に入るまでの一年間を、ただひたすら働くことに費やした経験がある。トラック運転手、配達、カラオケの店員……。多様な社会をかいま見ることのプラス面はあるが、結局はお金を稼ぐという目的につきる。社会へ出て働く前に、自分自身を見つめ、深く考える必要がある。その機会を見逃すことは悲しいことだと思ひ、進学した。

働きづめの生活は悲壮感しか残っていない。もつと文学に親しみ、雑学に興じ、環境問題に憂い、幅広い教養と問題に対し、柔軟に対処できる方法論を身につけたいと思う。せっかくの学生生活がアルバイトだけに追われるのは、とてももつたないと感じている。

私のような貧乏人がボランティアを続けるのは大変だ。それは今の社会ではボランティアは自己犠牲であるべきだという美徳観から成り立っているからだ。

ボランティアは社会の財だ。社会はそれに対して投資すべきだ。企業や政府もどんどん援助をすべきだ。ボランティアをしたくてもアルバイトのためにできない学生には、奨学金などで支援する制度が必要だと思う。

焼け野原の街、崩れた家の片隅で、毛布にくるまった父親の側に、ただ呆然としゃがみこんでいる母子の姿は、七年前にトラクターの下敷きになり、冷たくなった父親の亡骸のそばで、一人肩を落として泣いていた母の姿を私の記憶からよみがえらせる。

じつくり気長にボランテニア

中島 京（北里大学一年）

一九九五年一月十七日。私はいつものように東京で受験勉強をしていた。新聞やテレビの地震に関する連日の報道は、今、何かしなくていいのかと心に揺さぶりをかけはしたが、浪人のわが身としては、まずは大学受験を終えてからだと思つた。無意識のうちに、受験が行動を規制していた。とりあえず、受験に勝つこと。それが私の当面の課題だつた。

二月中旬、私は同じ静岡出身で幼なじみの原口君が神戸で被災したことを知つた。アパートは半壊したものの幸い命に別状はなく、神戸に残つてボランテニアをすつと云う。

「どうだ、一緒にやらないか」

もちろん異議はない。すでに大学合格を手中にしていたし、神戸の惨状やボランテニアの活躍を見るにつけ、神戸へ行こうという思いが高まっていたところだつたからだ。

そして神戸へ。あしながボランテニアとして、主に遺児宅への家庭訪問が私の仕事である。倒壊した家で、雑居の避難所で、身を寄せる知人宅で、家族を失つた子ども達と出会い、残された人々の生の声を聞いた。無残な神戸の風景と遺族の言葉は、予想をはるかに超えた強い衝撃だつた。

私は、この活動によって何をする事ができるのか。彼らにとって何になるのか。張り切っていた当初の気持ち、みるみるうちにしぼんだ。活動を続けながら自問自答する日々が続いた。ささいなことで気持ちが激しく揺れ動いた。

二週間を過ぎる頃、慣れと無力感の慢性化でグツと気分が落ち込んだ。原口君はじめ一緒に始めた仲間も同じ思いだったようだ。みんなでいろいろ話し合ったり、後続のボランティア達のやる気に触発されたりして、なんとか乗り切ることができた。

そして三月も終わる頃、「有馬のつどい」で、地震によって進学を断念した人々に出会った。親の死によって突然一家の生活の担い手となった人。浪人中に被災して妹のために社会人になった人。私が「当然のように」受験を最優先させていたあの時、彼らは目の前の夢を失ったのだ。胸を衝かれて、私は言葉がなかった。

神戸をはじめ今、不自由な状況に立たされている人々に何ができるのか、私の中でまだ答えは見つからない。だからこそ逆にゆっくり考えてみようと思う。

とにかく活動を続けていこう。肩に力を入れず、じっくり気長に取り組んでいこう。たった一カ月の活動だったが、被災者の方や仲間のボランティアから物事にはさまざまな見方があることを学んだ。自分とまったく違う意見を認める柔軟性も身についた。この貴重な体験をもとに、一步一步確実に考えを進めていきたいと思っ

悲しみをさらけ出せる環境づくり

藤井順子（国際基督教大学四年）

私は以前ポーランドに住んでいた。突然戒厳令が敷かれ、一家は父だけを残して日本へ帰国した。住む家を探す暇もなく、荷物は背中に背負ったりリュックだけ。途方に暮れていた私達四人に手を差し延べてくれたのは、昔日本に住んでいた頃のお隣りさんだった。ただ一時期隣りに住んでいたというだけなのに、実に快く迎え入れてくれた。私はまだ八歳だったけれど、そのご家族の親切が言いようもなくうれしかった。だから今度の震災も、まったく他人事とは思えなかった。同じ日本で起きたことなのだ。傍観者でいいはずがない。

すぐにも神戸へ飛んでいきたかった。が、私には試験や就職活動という現実があり、ようやく三月末の「有馬のつどい」の四日間、ボランティアに参加することができた。

つどいの夜、子ども達に話しかけながら、亡くなった家族に向けて作文を書いてもらった。つらい記憶をえぐり出すようなこの作業は、被災経験もなく両親も健在な私には、とても酷なことに思えたが、たとえ痛みを伴っても悲しみを外に表しておくことが大切なのだ、という話を聞いて納得できた。

本当に、子ども達は想像以上に傷ついていた。表面は意外なほど明るく平静だったが、それ

は大人の気持ちを感じたことなのだ。少し慣れてくると、遠慮がちに甘えが出てくる。たとえば小学校四年生ぐらいだろうか。体の大きな男の子が、おんぶしてとやってくる。甘えたい、でもお母さんは死んじゃった、口に出しては言わないけれど、彼がそう叫んでいるように思えた。

帰国の日から十四年もたった私の心にさえ、あのどうしようもない不安感、父親とはなればなれになる寂しさがこびりついているのだ。ましてや、大震災の恐怖と目の前で肉親を失ったという悲しみが、そうおいそれと癒されるはずもない。このまま深く深く心の奥底に悲しみを閉じ込めてしまったら、何か将来に影響が出てくるような気がしてならない。

神戸の物質的な復興もさることながら、もっと精神的なケアにも目を向けてほしいと思う。むしろその方こそ危急の問題ではないか。私には、一緒に遊んだり、おしゃべりしたりして、ほんのささやかな愛情を注ぐことしかできないけれど、また、きつと会いに行きたいと思う。

日本中の人々が震災のニュースに飽きはじめた頃ちようどオウム事件が起こり、いつべんに神戸に対する関心が薄れてしまったように見える。しかし、この子ども達に、震災で受けた傷に負けずに、たくましくやさしく、温かい心の持ち主に育ってもらうためには、まず何よりもみんなが忘れないことが大切なのではないだろうか。ボランティアも一時的な盛り上がりで終わることなく、それぞれができることを末永く続けることが大切なのではないだろうか。

神戸で教師になりたい

原口博之（甲南大学二年）

一月十七日五時四十六分。怖かった。ダンスは倒れ、テレビが飛び、一瞬にして部屋の中はメチャクチャになった。鉄筋だったせいか、灘区のアパートは幸いにも半壊程度で済んだが、気がつくとも周囲の木造家屋は軒並みつぶれ、たくさんの人が生き埋めになっていた。救助しなくては、とつさにそう思ったが、あいにくメガネが見つからない。私は日が悪く、メガネなしでは動けないのだ。友人たちが走り回る中、ただただじっとしていた。無念だった。

その後、静岡の実家に帰っていたが、震災報道を目にして神戸に戻るべきかどうか悩んだ。被災者なんだから無理するな。あんな怖い思いは二度とごめん。しかし、みんな苦労している。自分よりもっとつらい目にあつた人たちががんばっている。今、何かしなくていいのか。気持ち揺れ動いていた時、交通遺児大学生の福代君に誘われた。ボランティアとして神戸に行かないか。まだ決めかねてはいたが、部屋の片づけもある。いずれは戻らなければならぬのだ。思い切つて参加することにした。

遺児家庭の訪問を始めてはみたものの、一回目はまず断られた。資料を置いて帰り、しばらくしてまた行ってみる。繰り返すうちに、しだいに子どもたちが姿を見せてくれるようになって

た。とにかく子ども達と仲良くなろう、と心がけた。お天気いいね、などと明るく話しかけ、ボランティアの事務所でもボールやなわとびを借りて一緒に遊んだ。そのうち、姿を見かけると、あ、お兄ちゃんが来たと喜んでくれるようになった。兄弟ゲンカをするようになったのを見て、なんだかともうれしかった。被災してまもなくはケンカする余裕もなかったのだろう。

話をするうち、遺児たちの心の傷は何より親をなくしたことにあるのだということがわかってきた。地震も怖いし、家がつぶれたり燃えたりしたことも悲しいけれど、やっぱり父親や母親、兄弟姉妹が二度と帰ってこないことが最大のショックなのだ。私は現地で被災したが、家族をなくしたわけではない。私のパートナーの遺児大学生が子ども達と悲しみを共有する姿を見て、自分の限界を感じることもあった。

落ち込んだり励まされたりしながら過ごすうち、自分の中である考えが芽生えた。

「このまま神戸に住み続けたい」

それはやがて確信になった。教師になりたいという気持ちは前々から持っていたが、今は、ここで教職に就きたいと思う。子ども達とともに神戸に住み、一緒に神戸の復興に立ち会っていききたいのだ。地震はいやだ。しかし今度のことがなければ、これほどまでに多くの人と友達になることも、自分の進路について深く考えることもなかっただろう。つらい体験をバネにして、子どもたちが元気に成長していってくれることを願わずにはいられない。

運動会に一緒に出てくれへん？

宮崎信一（大阪工業大学三年・作文集『とつてもくやしい』編集長）

「あなたは交通事故で親が亡くなってしんどかったでしょうけど、家はあるんでしょう。私は主人も亡くなって、家もなくなって……。家で足を伸ばして寝ることもできないんですよ」

遺児家庭のお母さんに怒り口調で訴えられ、私は何も言えず、頭がボーッとなくなってしまった。震災の人のために何かしてあげようと思って来たのに、逆に何か悪いことをしてしまったのかな、そんな思いを打ち消し、いつか、僕達のことをわかってくればいい、と自分に言い聞かせて、震災遺児を訪ねて歩いた。

それでも訪ねたはなから、結構です、ほっといてください、と断られることもたびたび。ここで負けたらあかん。連絡をとらんとこの人たちを置き去りにしてしまうと、自分を奮い立たせるも、ともかくつからった。さらに自分の時間はなくなる。アルバイトを休んだためクビになり、ボランティアの交通費にも困った。

「私も主人を亡くして、子どもが残って不安です」

「わざわざ来てくれてありがとう。これからどうしたらいいのかわからない」

と訴えるお母さんに出会い、私たちに対する期待を感じ、四年前、自分の母親も同じように

不安だったんだろうな、と思った。私は少しでも役に立てばと交通遺児としての体験を話した。めっちゃ、つらい思いは消えていった。

「震災遺児の人には、同じ体験をしている遺児がいるんや、ということを知ってほしい。一般の人には、この子らを支えていってほしい」

そんな思いで震災遺児の作文集を出した。

「私達には想像できない思いが、子ども達の中にあっただな」

同じ遺児として、遺児のつらい思いを他人事にとってもらいたくない。

私たちのボランティア活動が実ったとうれしく思ったのは、九月二十三日、小学校五年の有川雅隆君の運動会に「お父さん役」で参加したことだ。雅隆君は母子寮でも友達がいらない。私は何度か遊びに行き、よくキャッチボールをした。

「二十三日の運動会、一緒に出てくれへん？」

言いくそそうな、ボソボソと言う雅隆君の声。ふるえるようなうれしさと私が父親役でいいのかという心配。次の瞬間には、絶対行くよ、と私は答えていた。

運動会の日、力いっぱい走って、大きな笑顔があった。お母さんの笑顔もうれしかった。その日は、雅隆君の十一歳の誕生日でもあった。私たちは大好きなジャイアンの野球帽をプレゼントした。これからや、今はそんな思いだ。

震災遺児のSOSを見落とすな

高木克久（大阪産業大学三年・作文集『黒い虹』編集長）

交通遺児や災害遺児や病氣遺児の仲間六人で、先輩の安否を訪ねて神戸へ行ったのは一月十八日だ。全壊の家、風呂桶が屋根の上にあったり、電線が垂れ下がり、お花が供えてあったり、手を合わせている人がいたり、ガスの匂い、声も出せず、歩くのも恐かった。

「何かせなあかん」

瞬間にそう思い、翌日から避難所のボランティアに行った。荷物運び、食料の配付、なんともいえない匂い、食料をもらうために押し寄せる人、訳の分からない緊張感で体が強張る。

「ただ、何かせなあかん」

そんな思いだけで動いた。

二月十日、御影工業高校の避難所で、遺児の原島由紀先輩にバツタリ会い、あしながグループの遺児捜しのボランティアを知った。

毎日毎日、瓦礫の中を地図を頼りに朝から晩まで歩く。一日一軒の遺児家庭がわかったらしい方。学校で確認し、家を探す。道がふさがっていたり、行ってもわからなかったり。学校の先生にもう一度電話をすると、聞き込んで捜せ、と怒られる。頭に来る。坂道を登ったり、下

ったり。ともかく、疲れた。それでも、少しでも手掛かりが見つかると、オッシュャー、と元気が出てきて歩き回った。一日終わって帰ると、鼻の穴は真っ黒、体中がほこりだらけだった。

震災からもう九カ月がたち、神戸に来て景色をみれば、空地が多いだけのように見える。テレビも立ち直っているとの報道が多くなっている。そんな報道には無性に腹が立つ。

この夏、震災遺児は、どうでもいいんだ、私も死ねばよかった、と作文に書いている。子どもたちはほっとかれたままだ。遺児のSOSを見落とすなと自分に言い聞かせた。

私も小学校一年生の時に母親を交通事故で失い、

「ほっといて！。遺児同士が集まって傷のなめあいしてどないなるんや。みんなと同じや」

と生きてきた。でも、交通遺児のつどいに出てから、本当に楽になった。片親だということをしてると友達に対して罪悪感があるのだ。

知らないうちに、震災遺児と自分を比較している。私にも傷はあったけど、震災遺児にも心の傷はあると思うし、ほうっておけない。彼らは、目の前で肉親を亡くしたり、声が聞こえてくるのに助けられなかったり、私にはどうも想像もつかないような経験をしているのだ。だからほっといてと言う子もいる。表面的にはそれでいいのだろうが、本人も気づいていないけれど、心の傷が癒されていないと思う。

ボランティアしながら、自分探しをしているのかもしれない。

やればできるといふことを体感

福代孝良（東京農工大学三年）

朝日新聞の武蔵野版で「東京農工大の救援日記」として、私たちの神戸でのボランティア活動が五回連載で載った。二月三日、私はその第一回に参加した。渋谷教授の研究室でボランティアに行くという話を聞き、ついでに行くことにしたのだ。

ボランティアに行くのは野次馬的、偽善的と思っていたが、神戸の人から直接話を聞き、本当に必要だと思った。二月五日から十五日までは学年末試験だったが、すぐに、先生に試験を受けられない事情を話して出発した。

私が入ったのは、灘区の成徳小学校だった。与えられた仕事は一日三回の便所掃除。川からポリタンクに水をくみ、その水で掃除をする。一回につき一人三往復は水を運ぶ。避難所の外の人、小学校のトイレに来て垂れ流すため、すごく汚ない。そのため避難所住民と周辺住民の対立があったほどだ。

便所掃除の他は、荷物おろしに夜警だ。浮浪者同士のケンカがあったり、強盗があって夜通しパトカーがサイレンを鳴らしていたり、何か無法地帯みたいだった。

米軍テントに泊まっていたが、雪の降る日もあり、ともかく寒くて寒くて、寝袋に毛布をつ

っこんで寝た。しかし、そうした生活のつらさより、結構暇でタラタラした生活で、物資も避難所にあまっていたりといった、思いと現実が空回りしてしまうことのほうがきつかった。

そこで、私たちは在宅被災者の調査を独自で始めた。すると避難物資があたらない人や家から一步も出られない独居老人など、取り残された人がたくさんいることを知った。名簿を作った。お風呂情報、焚き出し情報、掲示板の設置もした。

あしながグループの仲間の応援で学童クラブを再開させ、紙芝居やゲーム大会をした。すると避難所の十人くらいの子ども達に加え、周辺からもたくさんの子ども達遊びにきた。

それでも物足りず、独自でボランティア会議に行き、高齢者福祉団体に独居老人の支援を頼んだり、隣の避難所と見回り地区の割当てを決めたりした。

その後、成徳小学校には東京農工大の学生が大勢来るようになったので、私は震災遺児捜しに力を注いだ。特に住民台帳の閲覧を担当した。ストレートに行ったら断られるのは成徳小での体験で分かっていたので、ボランティア会議に出て、力のありそうな人を見つけ、そこから頼んだ。結果は上々。気合勝ちだったと思う。

どうせ無理と諦めてしまうことも、やればできるということを感じた。おかげで大学もボランティアレポートを各先生に提出し、追試やレポートでなんとか必要な単位はとれた。

君が福代君か、と学校で知らない人に言われたことがあり、照れている。

神戸に、ありがとう

堀内麻紀（都留文科大学二年）

先生からあしなが育英会を紹介され、遺児の家庭訪問という目的で神戸へ行くことになった。神戸を見てこよう、正直言って最初は好奇心もあった。荷物の中にこっそりカメラも忍ばせた。でも活動を始めると、いつの間にかそんな気持ちはどこかに消し飛んでいた。

遺児でも被災者でもなく、何の面識もない私に子ども達が心を開いてくれるのだろうか。何か語ってくれるのだろうか。毎日が緊張の連続。案の定、活動の意味が理解されずに冷たくあしらわれたり、宗教の押し売りや勘違いされて困惑することもあった。

何よりもまず、子ども達を目の前にして、話しかける言葉が見つからないのだ。

「いつも何して遊んでるの？」

かろうじて初めの言葉を口にした。境遇は違っててもなんとかわかり合いたい。手さぐりで気持ちや伝え、何度も訪問するうちに、だんだん重かった口が開き始めた。ある時は涙を伴って、ある時は笑顔と一緒に。そのうちに、何かしてあげようと思ってやって来た自分が、実はかけがえないものを「もらって」いるのだということに気づいた。

みんな、ありがとう。私のボランティア活動は、今始まったばかりだ。

この目で見て、肌で感じたい

林 篤司（筑波大学二年）

あしなが育英会の奨学生仲間呼びかけで一月三十日から二日間、つくば市で震災遺児激励募金をした。

だが、今一つ震災遺児がどれぐらい大変なのか実感がわかなくて、何か訴えている自分に罪悪感を感じた。訴える以上、自分のこの目で見、肌で感じたいと無性に思い、遅ればせながら八月に訪問調査に参加した。

両親を亡くし、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に暮らしている三歳の男の子に会った。震災から八カ月たった今も、男の子は、暗くて恐い、と言って、決して一人では二階に上がろうとしないようだ。確かに、僕たちと普通に話しているときはとてもやんちゃなんだが、地震のことに触れようとすると急に黙ってしまう。

訪問前は子ども達の気持ちを聞いてあげようなどと、やけに意気込んでいたが、実際、残酷な気がしてとても聞けなかった。だから、とにかく一緒に遊んだ。帰ろうとすると、帰らないで、としがみつかれた。いきなり行った僕達をこうまで慕ってくれるなんて……。

今は、遠くにいてたびたび訪問できないことが、なんともやりきれない気持ちだ。

この子らをほうっておけない

小野美月（中村学園大学二年）

震災で母親を亡くし、父親と小学生の女の子二人、幼稚園の男の子の一家四人で九州に引越してきた人を訪問している。父親は子ども達が心配で職に就けない状態で生活が大変そうだと、男の子は、八月に母親の死を知らされ、極端に甘えるようになった。割り箸をすぐに折ってしまい、危ないから、と言っても、

「地震はね、ぐちゃぐちゃになるんだよ」

とやめようとしない。九州弁がきつく聞こえるのか、オドオドしている。関西弁を話すと、回りの子供たちの目が怖いようだ。女の子たちは学校は楽しいと言うが、友達と全然話さない。これからは体のことや精神的な面で一番母親を必要とする時期だから、お父さんはどうしていいかわからないようだ。私は母子家庭だが、母親が親として女性としても支えてくれていて、正直よかったと思う。だから、子ども達と遊ぶだけではダメだと思っていた矢先に、

「子ども達と遊んでもらうだけで十分。それ以上何も期待しない」

と言われ、ショックだった。でも、とてもほうっておけない気持ちもあり、どうしたらいいか悩んでいる。

被災者の側に近づきたい

加藤智久（東北工業大学二年）

僕は、高校二年の時、突然父を脳出血で亡くしたが、そんな僕でも震災遺児の精神的ショックがどれほどなのか、正直言ってみても想像もできない。

突然の激しい揺れで家がつぶれ、猛火に焼き尽くされ、目の前で親を亡くし、自分自身も死んでもおかしくないような状況の中で、人は一体何を考え、どんな行動をとるのだろうか。他人よりもまず自分。もしかしたら、家族のことよりも、まず自分。

いや、やはり、わからない。

その凄まじい体験を引きずって生きていかなければならない。もし僕だったらと思うと、とても恐い気がする。

八月に神戸に行くまで、被災者のことをこんなに深く考えることはなかった。自分なりに何かしたいとは思っても、本当のことを知らないで生活していたのだ。

神戸では、訪問調査の裏方として、ボランティアの食事の世話や訪問先の割り振りなどを担当した。被災者の人に会うことはできなかったが、それでも現場に立ったことで、被災者の側に少しでも近づけたことは、僕の人生にとっても貴重な体験になった。

ボランティアは特別なことではない

市川裕己（静岡大学二年）

訪問調査で、両親を亡くした高校生の里親になった人がこう話してくれた。

「私は周りから、いいことやってる、偉いね、と言われるけれど、そんな気持ちでやっているのではない。この子が幼な過ぎたら面倒は見れないが、高校生だし、前々からよく知っている子だから里親になっただけ。それに変に優しくはしていない。この子の将来のことを考えたら、自立しなければならぬのだから、食事や身の回りのことは全部自分でできるように教育していくつもりだ」

それまでの僕のボランティアに対するイメージは、とにかく優しい人が優しい行為をすることだった。しかし僕自身は人に対してそんなに優しくできない性格らしいので、神戸に誘われた時、イメージと自分の考えの間で戸惑っていたような気がする。

三月と九月に神戸に足を運び、自然体で里親になっている人に出会い、自分の考え方でいいんだ、ボランティアって何も特別なことではないんだということを確認できた。

僕は今工学部に籍を置いているが、今回の体験から、人と深くかわっていくような仕事に就きたいと考えるようになった。

震災も弱者を差別している

市川善規（北海道大学一年）

僕は小学校五年の時、父を災害で亡くしたが、あまりにも突然だったのでしばらくは信じられなかった。母も相当参っていて、一年ぐらいは他人を受け入れる余裕などまったくなかった。きつと震災遺児家庭もそうだろうと思うと、どのようにしたら少しでも受け入れてもらえるのか、自信がなかった。

訪問したある家庭のお母さんは、夫と小学二年生の子どもを亡くし、自身も足の骨を折って一カ月入院。震災から四カ月ぐらいは何もする気になれず、このまま死んでしまった方がよかったんじゃないか、ということばかり考えていたそう。でも今は、残された子どもが楽しく学校に通ってる姿を見ると、あの子がいるから生きて行こう、仕事もしようと思う、と言っていた。僕の母もそうだった。改めて母親の偉大さを感じた。

とても腹立たしかったことは、神戸市民にも上中下があつて、一番被害を受けたのは下流だという話だ。震災さえも差別して弱者にひどいことをするのだ。

震災遺児家庭の生活はますます苦しくなると思うし、いくら母親の力が偉大だからといって、はたして耐えられるのだろうか、とても気になった。

阪神震災遺児救援の軌跡

1995年1月17日午前5時46分 阪神・淡路大震災発生。マグニチュード7.2。

1月18日 被災地に住む奨学生・あしながさん約8000人の安否確認を開始。

1月21日 あしなが育英会職員樋口和広、田中敏を被災地へ派遣。3日間で50*以上を歩き、安否を尋ねる。本会理事会で、「阪神大震災遺児奨学金の特例措置」を決定。

1月30日 「奨学金特例措置」と「震災遺児激励募金」全国実施を記者発表。

2月10日 被災地の学校に訪問し、震災遺児調査を依頼。御影工業高校（神戸市東灘区）に拠

点設置。

2月15日 プライバシー保護を理由に震災遺児調査に協力してくれる学校が少なかったため、震災遺児を捜すローラー調査開始。新聞発表の死亡者名簿から20歳から59歳の犠牲者1718世帯を一軒一軒訪問。

2月18・19日 全国で激励募金ボランティア初体験の学生・高校生も多数参加。1億1677万円の募金と3千通の励ましのメッセージが集まる。

2月27日 「あしながボランティア神戸本部」設置。約30名の喫茶店へ移転。

3月10日 震災遺児20人への奨学金初送金。

3月13日 経団連1%クラブを通じて「コニカ」からコピー機の無償貸与を受ける。

3月16日 「震災遺児ローラー調査」発表。504人の遺児を確認（推計641人）。参加ボランティアのべ881人。NHK



この子達に早く心からの笑顔を取り戻してほしい。

の午後7時ニュースと「クロージアップ現代」で全国放送。各紙も報道。

3月26日・27日 有馬温泉で「震災遺児を励ますつどい」を開催。遺児親子96人と遺児学生ら53人参加。ライオンズクラブが経費全額支援。この日までにのべ1308人のボランティアが活躍。自然発生的に「阪神大震災遺児と共に生きる会」が誕生。

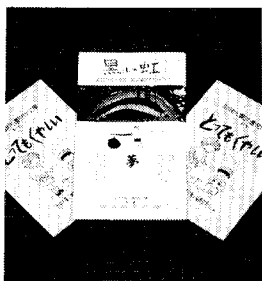
4月1日 あしなが育英会神戸事務所開設。3月までのあしながボランティア神戸本部と同所。**4月17日** 神戸事務所に樋口和広所長代理、八木俊介職員赴任。所長は山北洋二事務局長（東京勤務）。

4月26日 震災遺児作文集第1集「とつてもくやしい」刊行。A6版32ページの小冊子でライ

オンズクラブが15万部の印刷費負担。大反響。

4月28日 米国系の生活関連メーカーのP&G社世界1500カ国10万人の社員と本社から44万ドル（3600万円）が震災遺児奨学金として寄付。

5月6日 震災遺児家庭のゴールデン・ウィークの過ごし方調査発表。「どこへも行かなかつた」46%、「日帰りで出かけた」32%。「灰色」の1週間。



子ども達のあふれる思いをつづった作文集。

6月11日 神戸事務所で「ボランティア会議」を開く。時間と費用負担が問題でボランティア不足は深刻だが、「細く長くボランティアを続けたい」という意見が大半だった。

6月29日 「阪神大震災遺児激励募金（2月18日・19日の街頭募金と郵便振替募金）」を震災遺児2人当り20万2千円ずつの送金が完了。552人に全国から寄せられた励ましのメッセージを添えて贈った（17人が辞退）。配分総額は1億1150万円。**7月15日** 震災遺児の保護者懇談会に14人が参加。夫の死からまだ立ち直れず、前向きにはほど遠い姿が浮き彫りになった。新たに確認した震災遺児31世帯65人を加え、335世帯569人の震災遺児を確認。

8月8日～10日 第2回阪神大震災遺児を励ますつどい（香住のつどい・兵庫県香住町のボランティア団体「ボランティア2000」と共催）に震災遺児37人が参加。海水浴やキャンプ、アイヤーを楽しむ。「黒い虹」を描く震災遺児にシヨック。子ども達の心の傷は日々深くなる。

8月11日 震災遺児の『心の傷』調査発表。親の死に自責や罪悪感を持つ子どもが半数以上。「心の傷を癒すには話すこと、書くこと」と副田義也筑波大学副学長。

8月23日～9月3日、9月21～24日 震災遺児家庭訪問調査。204世帯をのべ812人のボランティアが聞き取り調査する。震災体験、亡くなった家族、失った物、生活の再建、子ども達

の変化などについて尋ねる。

9月27日 ろうきん（労働金庫）の震災遺児支援定期預金「応援（エール）30」の預金総額は、全国で500億円（目標300億円）にのぼったと発表。預金利息30%とろうきんの寄付上乗せを合わせ、2億3400万円が震災遺児奨学金の寄付決定。

10月13日 震災遺児作文集第2集「黒い虹」発刊。震災遺児の描いた真つ黒の空に濁った黄色と緑と黒の虹の絵がカラーで表紙に。朝日新聞夕刊は第1面カラーで紹介。

10月18日 副田義也筑波大学副学長による震災遺児家庭訪問調査の分析結果を記者発表。自責や罪悪感を持つ子ども、生き埋め体験から狭い暗い場所恐怖の後遺症など、心の傷の深さが明



香住のつどいでトーマボールをつくった。

らかになった。

10月21・22・28・29日 第51回あしなが学生募金。震災遺児への支援をのべ1万人のボランティアが街頭で呼びかける。

11月12日 「REMEMBER（リメンバー）神戸」。震災遺児と神戸で起きたボランティアの波を忘れまいと第9回あしながPウォーク10、全国130会場で開催。震災遺児奨学生は89人に（予約採用生を含む）。

第八章

レインボーハウスの設立をめざして

——あしなが育英会の実績と展望——



この子達に心からの笑顔が戻るまで…。

喪われた愛は愛でしかうめられない

あしなが育英会会長代行 玉井義臣

お読みいただいたとおり、震災遺児の親を喪失する体験と「その後」は、さまざまな原因で親を亡くすすべての遺児の中で一番大変だ、と言える。

親の死因は大別すると、多い順から①病死、②災害死、③自動車事故死(災害死の一部だが)のほか、自殺がある。狭義の災害死は、地震のほか、飛行機事故、火災、溺死、殺人など。親を亡くした遺児の側からすれば、大変さの一つは「親の死に目」で決まる。

自動車事故の場合、子が見る親は、大半は即死で自宅で見える包帯に巻かれた姿であり、即死でなければ頭を打つても言えぬ植物状態である。つまり、子は親の死に目に会えないし、会うのはすでに息絶えた親であり、事故現場でないのです。その凄惨さは見ずにすむ。

病死の場合は、病気が、がんか心臓病か脳血管疾患かそのほかの病気かによって、子らへの心理的影響はかなり違う。心筋梗塞や脳溢血で家族の前で突然亡くなることもあるが、大抵は

病院である期間治療を受けながら最期を迎えるので、家族はあるていど心の準備もできる。ただがんの場合は告知の問題があり、子どもには死の寸前まで病名を知らされることが多く悔いが残ることもある。一般的には一種の諦めの中で「お別れ」をすることになる。

しかし、阪神大震災の場合は、ほぼ共通して言えるのは、家族が一緒にいるとき突然家が倒壊して、梁や家屋などの下敷きになったり、はさまれてしまうケースが多い。瓦礫の中で親きょうだいが生死を分けることほどつらいことはない。プロローグの秋元一家にあるように、かっちゃんも亡くなっている父親と一緒に九時間生き埋めになって助けられる。「黒い虹」の絵や、吃音がひどくなったり、時にことばを失うのもわかるような気がする。親が自分をかばってくれたために自分だけが助かったと思つた子が自責の念を強く抱きすぎて、「死にたい」と言うのも理解できるし、他の死因の遺児とは決定的に違う「つらい親の死に目」が深い心の傷をつくる。

エレベーターやトイレが恐い、狭い所や暗い所が恐い、ポーツとして無気力になる、急に泣く、無口、乱暴、短気になる、不登校、学力低下、アトピーや喘息になる——などなど、愛するものを目の前で亡くしたという悲しみと恐怖と自責を、小さな体と心では消化できるわけではない。大人たちは酒を飲んだり、おしゃべりで気をまぎらわせることもできるが、子ども達はなす術を知らない。

他の災害でも、おおかたは交通事故か病気による突然死と似た状況で、親の死と対面する。

震災遺児は遺児の中で一番つらい親（きょうだい、祖父母とも）との別れをしていると言えるし、それがその子の心の傷となり、その癒しには愛と時間が必要だと考えられる。

次に、震災遺児は全遺児の中で一番貧しい。

説明に多くはならない。働き手の父親を失った上に、家も家財道具も何もかもがなくなる。家のローンはそのまま借金になることも多い。義援金ではこの穴は埋まらない。

ちなみに、交通事故だと自賠責保険から三千万円、任意保険もほとんどの車にかけているし、生命保険も災害特約で二、三倍はふつうだから、七千万円とか一億円を手にする遺族もめずらしくなくなっている。災害遺児家庭の半分は労働災害で、労災年金として死亡時の基本給与の約七割が妻に支給されないし、その過半数を占めるがんは入退院、手術回数が多く、死亡時には六割が預金ゼロか借金ができるから、病氣遺児も大変だ。



あしなが育英会の奨学生のつといては、遺児たちが自分史を語り合う。

家ごとなくなる震災遺児母子が一番貧乏になり、「負の遺産」を背負つての生活が始まる。やはり、震災遺児が一番大変なのだ。

遺児達の恩返し運動から生まれたあしなが育英会

僕は、三十二年前、母を交通事故で亡くした。二十八歳。半端な経済ジャーナリストだった僕に、交通犠牲者救済のペンを執らせたのは、母の死が可哀相すぎたからだ。昏睡のまま、治療らしい治療を受けられず、三十六日後、ボロ雑巾のようになって死んだ。僕はほとんど病室で付き添ったので、母の無念さがひしひし伝わった。六カ月後の示談金は五十万円ちよつと叩き売りのバナナみたいだった。母が即死だったら今日の僕はなかっただろう。

母の悔しさをバネに、被害者救済問題に取り組み、救急医療と補償の二論文を世に問うた。これが認められて「交通評論家第一号」となり、桂小金治アフタヌーンショーにレギュラー出演した。そのとき交通遺児救済を提唱していた岡嶋信治さんに出会ったのが、遺児救済運動の始まりだった。一九六七年夏であった。

交通事故遺児を励ます会はわずか十人ほどの二十歳前後のボランティアの集まりだった。街頭募金、遺児家庭の訪問調査、遺児作文集「天国にいるおとうさま」の発刊と、マスコミで世

論に訴えた。激増する交通事故を背景に、世論が政治を動かし、六九年五月、交通遺児育英会が誕生。僕が専務理事になり、設立者である励ます会から岡嶋さんら四人が理事になった。

それから二十五年、春秋の学生たちの街頭募金「あしなが学生募金」と教育里親「あしながさん」の寄付で百五十億円近くを集め、そのお金を核にして交通遺児四万二千人を進学させることができた。僕らは、奨学金貸与だけでなく、心のケアを重視して毎年夏休みに奨学生と合宿して語り合う「つどい」を開いた。自助と連帯を目的として、ゲーム、野外活動で打ちとけ合う中で、自分史を話し合わせさせた。悲しく辛い父親の喪失体験、自分の落ち込み、母親の生活との苦闘を順番に話す。話し聞くうちに、この世で一番の悲劇の主人公だと思つて心を閉じていた子らが、自分より辛い目をして生きている仲間が頑張っている姿を見聞きするうちに、「自分も頑張らなければ」と、人が変わったように明るく前向きになるのを、僕らは知った。自助の精神の芽生えである。

七八年、学生寮「心塾」を開き、「読み」「書き」「スピーチ」を中心に厳しいカリキュラムで人間づくりを始め、そこから幾多の有為の人材が育つていった。

交通遺児たちは、つどいで聞くあしながさんの無償の愛に感動し、恩返し運動を始める。同じ境遇なのに奨学金制度のない災害遺児のために、街頭募金、遺児作文集『災害がにくい』発刊、首相や各政党への訴えなど、たぎるような運動を五年間続け、紆余曲折のち、八八年四

月、災害遺児奨学金制度をスタートさせた。その年の夏、災害遺児が恩返し「病氣遺児育英」運動を唱え、やはり五年後の九三年四月には、奨学金制度をつくり、両制度が合併して「あしなが育英会」になるのである。いずれも遺児たちの自助活動の成果として高く評価できる。

九三年秋、資金豊富（三百六十億円）で交通遺児激減（当時推定三万人）の交通遺児育英会と、十倍以上の災害・病氣遺児を抱え資金難（五十億円）のあしなが育英会が一緒になれば全遺児が平等に進学できるという「両育英会合併論」を、あしなが学生募金事務局が提案する。首相、与野党、あしながさん、経団連、励ます会、大方の世論の賛成を得るが、「交通遺児の縄張り」を死守する「大きな勢力」との激突となり、僕は交通遺児育英会の専務理事を辞し（現在も非常勤理事）、あしなが育英会に全力投球することになる。「官」と「民」の闘いだが、官僚主導の「官主義」から民主主義への過度期の産物であり、いずれ歴史が判断を下すであろう。日本がボランティアをより必要とし、「ボランティア元年」といわれる今日、官が民の汗と心まで奪うことはできない。

心の傷を癒す「レインボー・ハウス」

こんな騒動の中で、阪神大震災が起こり、あしなが育英会は四日後「震災遺児奨学金特例措



親と死別した子ども達のための悲嘆教育施設、ダギー・センター。米国オレゴン州ポートランド。

置」を決定し、あとは震災遺児一色ともいえる救援活動一筋である。それが「第六章 あしながファミリー神戸日記」から続く活動である。

そして今、僕らあしなが育英会とボランティア（活動する学生らと寄付ボランティア）からなる「あしながグループ」が、震災遺児たちに今後なすべきことは何か、と考えている。

進学と心のケアは遺児支援の二本柱であることには変わりないが、遺児の作文や二百四世帯訪問調査から遺された親子の悲痛な心の叫びを聴くと、まず遺児たちの心の傷を癒すためのケ

ア活動が急務である。それも腰をすえた、相当長期にわたる継続的なケア活動が必要だ。

僕らは二十余年のつどいの体験から、親を失った悲しみや、そこから生まれてくるさまざまな苦しみ・辛さなどを心の中にしまわずに語り合うことから、心の重荷をおろし、心の傷が癒されるきっかけがつかめることを学習した。多くの遺児がそこから自立、自助の道を歩み、成長していく姿を見た。それはいわば心の「マイナス」の状態から「ゼロ」になり、「プラス」に転化するために、くぐらなければならぬ関門と言えよう。

これを「傷のなめ合い」と思う人もいるだろうが、副田義也

氏の調査分析にもあるように、「心の傷がないかのように振舞う子どもは、体験の記憶から逃げながら内面でとらわれているのだから、心の傷は長く残る」。また、別稿で同氏は「自然なかたちで、遺児たちが、震災のことを書いたり話したりするのが、心のケアの第一歩だ」と述べている。

近年、僕らがつどいの自分史語りでやってきた心のケア活動が、アメリカでも行われて成果をあげている、という報告を米国ABC放送や朝日新聞で見た。オレゴン州ポートランドに、八二年に創設された「ダギー・センター」という、遺児のためのデイケアの悲嘆教育施設がある。さまざまな死因で親を亡くした子らが、年齢別、親の死に方などによって十〜十二人ぐらのグループに分けられる。子らは亡くなった親の最後の思い出などの体験を話す。その後、絵を描いたり、劇をして遊ぶ。自分の悲しみを創造的に表現するためだ。一緒に泣くこともできる。自分達はひとりぼっちでない、と知る。子ども達は手を握りあって輪になって座り、お互いの温かさを感じながら、ここが安心していられる場所であることを実感する。キーワードは「癒し(Healing)」だという。(九一・一〇・二八「朝日新聞」、飯塚真之記者)

テレビで見た時も、僕は思わず「同じことやってるわ」と叫んでしまった。僕らのつどいでも、高校生たちは「クラスの友だちには話せないことがここでは安心して話せるし、心の友ができた」と異口同音に言う。「つどいから帰って人が変わったと母に言われた」(林田聡君)。

があつてこそであり、本書の一頁一頁は遺児親子の心底からの叫びとボランティアの心のぬくもりの結合体である。僕らあしなが育英会も職員一人ひとりがボランティアの気持ちで、裏方に徹し、両者の接着剤になつた。行動したボランティアも募金も入れると何万人にもなる。ろうきんやP&Gなど日本と世界百五十カ国の何百万人も労働者の皆さんからの寄付はボランティア社会の夜明けを感じさせる。一般市民、学生・生徒の数も計り知れない。五百六十九人の震災遺児のために、こんなに多くの暖かい心と汗が集まつたことに改めてお礼を申し上げるとともに、皆様とともに誇りに思いたい。

順序が後先になつたが、激職の副田義也筑波大学副学長と、研究グループの皆様には分析作業と報告書執筆でお世話になつた上、副田先生には本書の監修まで引き受けていただいた。早瀬昇・大阪ボランティア協会事務局長にもすばらしい原稿をいただいた。

あらためて関係各位に厚く御礼を申し上げます。

本書の印税はあしなが育英会がすすめる震災遺児らのデイケアセンター「レインボー・ハウス虹の家」の建設のために使わせていただきます。

阪神・淡路大震災で亡くなられたすべての犠牲者のご冥福を心からお祈りいたします。

(一九九五年十二月)

ことになればと願って。ご支援を心からお待ちする。

つどいやその他のケア活動は従来どおりやるが、内容をよりきめ細やかにしたい。

奨学金の募金は、七億円目標だが、「ろうきん」(労働金庫)から十一万余の労組・組合員の善意二億三千万円。震災遺児特定寄付金が約二億円。あと三億円弱である。気長に募金を続ける。

心の傷が癒されなければ、高校進学もダメになりかねない。

失われた愛は愛でしか埋められない。遺児とともに生きていきたい。

*

*

本書出版を決心したのは十月初旬。震災一周年に人々に読んでもらうには、年内配本でないと手遅れとのアドバイスもあったが、今の出版事情では、奇跡でも起こらないとそんなスピド出版は無理といっているので、あきらめかけていた。その時古い友人の作家副田護さんが、廣済堂出版の堀江律治編集長を紹介してくれ、十二月配本で快諾を得た。

十月はあしなが育英会の募金キャンペーン月間で職員はほとんど動けず、調査レポートの要約などはたくさんのボランティア記者の活躍と、編集グループ「マザーズ」の尾上悦子さんらの応援を得て、十月末入稿という離れ業をしていた。

言うまでもないが、訪問調査、作文集ともに、震災遺児親子と学生ボランティアの信頼関係

僕が今ほんとうに心配しているのは、奨学生になれる年齢の高校生や大学生ではなく、幼児や小中学生だ。「子どもはまだ人格が未熟なため親の死からくる悲しみを処理できず、放っておくと人格形成に大きな影響を及ぼし、その後の人生を方向づける」と専門家は警告する。調査でも子どものSOS信号と思えるさまざまな「問題行動」が報告されている。小さい子ほど一日も早い心のケアが必要なのだ。明日では遅い。

だが、今の職員二人と学生のボランティア・スタッフしかないわが神戸事務所の現状では、百人も二百人もの日常的ケア活動はとて不可能だ。誰もが日帰りか一泊で来られて、職員やボランティアと遊んだり、話し合ったりできるデイケア・センターがほしい。常時来られる市民ボランティアももっと必要だし、ダギー・センターのようにスタッフの訓練も必要だ。

僕らあしなが育英会の本来の目的は奨学金支援で高校・大学進学を促進することだが、今この震災遺児の心の傷を見た以上、対象年齢にならないからといって放っておけない。

「デイケア・センターをつくりたい。そしてかっちゃんのような子がいつも来て安心できる、駆け込み寺にしたい」、これは実は神戸事務所の樋口和広の願いでありアイディアなのだが、震災直後から遺児とともに不休で生きる彼の提案を、僕らは実現に向けて運動したい。

僕らはそれを「心の家」、愛称「レインボー・ハウス」（いずれも仮称）と呼んで、震災遺児だけでなくすべての遺児たちの心の憩いの場にしたい。かっちゃんらがきれいな虹をとり戻す

あしなが育英会の奨学制度について

あしなが育英会は、病気や災害で親を亡くしたり、重度後遺障害のため働けない家庭の子どもたちに①高校・大学等への進学援助と、②心のケアで、物心両面の支援をする民間のボランティア団体です。事業は次の通りです。

① 奨学金の貸与

奨学生採用は、主に中学3年生・高校生3年生など高校・大学進学前に予約募集します。貸与月額は、高校奨学金(国公立)2万5千円、(私立)3万円、大学奨学金(一般)4万円、(特別)5万円、大学院8万円です。返還は、卒業後20年以内割賦返済で無利子です。

② 奨学生の教育・指導

夏休みには、自助と連帯をめざして、3泊4日の「高校奨学生のつどい」、5泊6日の「大学・専門学校奨学生のつどい」を開催。野外活動で汗をかき、「自分史」を語り合う中で喪失体験を和らげ、生きる意欲を高めます。

● 阪神大震災遺児への奨学金特例措置

特に震災遺児には、①入学時のみならず在学途中でも奨学金が借りられます。②私立学校に進学した場合、入学一時金として私立高校30万円、私立大学40万円を貸与します。③専門・各種学校生にも月額4万円を貸与します。その他奨学金の貸与月額などは一般制度と同じです。

● ご寄付のお申し込みは

① 一般寄付

郵便振替 00140-1-541731 あしなが育英会

② 阪神大震災遺児特定寄付

郵便振替 00100-1-171252 あしなが育英会震災遺児口

③ 継続してご寄付くださる「あしながさん」ご希望の方は、資料をお送ります。

あしなが育英会

東京本部 電話03-3221-0888

F A X 03-3221-7676

神戸事務所 電話078-843-7955

F A X 078-843-4884

監修者の言葉

筑波大学副学長 副田義也

一九九五年八月、あしなが育英会はボランティア八百十二人を動員して、阪神・淡路大震災による震災遺児家庭二百四世帯の訪問調査を行った。その調査によってあきらかにされた震災遺児家庭の生活と心理の実態の報告が、この書物の主要な内容となっている。私は、その調査を企画立案し、私が主宰する研究グループがそのデータの学術的分析を行っているが、本書はそのデータ自体を、その社会的意義を考えて一足先に発表するものである。そのようないきさつがあつて、私は本書全体の監修の役割を引き受けた。監修者として、本書について三つの感想を記しておく。

第一は、本書であきらかにされる震災遺児家庭の真実の姿についてである。ここで、はじめて震災遺児家庭の親や子ども、親族などが、震災体験、親やきょうだいの死、残された家族の心の傷、現在の生活の苦しきなどを率直に、時に生々しく語っている。今回の大震災は、この

半世紀の間で日本を襲った自然災害の代表例の一つであるが、その被災者の実態がほかで例がないほど多面的に示されている。それはステロタイプのマス・コミ報道によつては、けつして伝えられなかつたものであつた。われわれはこれを読んで、震災遺児家庭への経済的援助と心のケアの双方の必要を認識するとともに、震災遺児家庭の残された家族が互いに支え合い、遺児達の少なからぬ者が不幸の体験をも心の糧として成長しつつあることに感動するのである。私は、これを読みながら、何度も、人間は立派な存在だ、家族は良い集団だと思つた。

第二は、本書で報告される調査に参加し、働いたボランティアの意義についてである。この調査ではじめて震災遺児家庭は真実を語つた。その主要な理由は二つあると思う。一つは、各家庭があしなが育英会にたいして持つていたそれまでの実績にもとづく信頼感である。これは次でふれる。いま一つは調査に従事したボランティアの主力があしなが育英会の大学奨学生で病氣遺児、災害遺児であり、震災遺児家庭の人々と親を失つた悲哀や苦悩を共通して持つていたことである。震災遺児家庭の親子は、訪れてきたボランティアが自分達と同じ経験をした人間であることを知つて、はじめて心を開く気持ちになつたのだ。この人ならわかってくれると思つたのだろう。聞き手の遺児のボランティアも、その話からあらためて自らの親の苦勞などを考え、学ぶところがあつた。なお、この調査には全国から募集した一般学生のボランティアも参加したが、彼らにとつてもこの調査の体験は大きい学習と成長の機会であつた。

第三は、本書で報告される調査を成し遂げたあしなが育英会の存在意義についてである。今回の大震災による震災遺児家庭にたいする社会的救援活動において、同会は常に先導的な役割を果たした。ほかで具体的に紹介されているので詳しくはそちらで見てほしいが、震災遺児家庭を発見するためのローラー調査、遺児の心のケアのための訪問活動やつどい活動、震災遺児への奨学金特例措置や激励募金など、同会は必要な活動を適切な時期に次々と展開していった。これらの活動が、先に言った震災遺児家庭の同会にたいする信頼感を形成したのである。あしなが育英会がそれらの活動から今回の実態調査までを行うことができたのは、同会の中にこの三十年近く展開されてきた交通遺児、災害遺児、病氣遺児の救済活動を通じて得られた運動のノウハウが蓄積されているからであろう。ボランティア活動への社会的注目が高まる中、あしなが育英会自体が日本社会の貴重な財産となっていると思う。

黒い虹——阪神大震災遺児たちの一年

編者 あしなが育英会

監修者 副田義也

編集協力 マザーズ

発行者 櫻井道弘

発行所 廣濟堂出版

〒107 東京都港区赤坂6-17-5

電話 03(3584)7610(営業)

03(3584)6123(編集)

振替 00180-0-164137

印刷所 廣濟堂印刷株式会社

〈編集担当〉堀江律治

©1996 あしなが育英会

Printed in Japan

定価は、カバーに明示してあります。

落丁・乱丁本はお取替いたします。

ISBN4-331-50517-0 C0036